

イソップ寓話の変容と寓意性

—明治・大正期出版「犬とその影」をめぐる—

谷 出 千代子

仁愛大学人間生活学部

Studies in the Changes of Aesop Allegory and Analysis Research
through a Comparison of *The Dog and the Shadow* in the Meiji and Taisho Eras

Chiyoko TANIDE

Faculty of Human Life, Jin-ai University

「イソップ寓話」は海外の物語としては日本に最も早く入って来た物語である。その話の定かな数には多くの異論があり、今だ定まっていない。当研究では明治期から大正末期までに翻訳、再話された寓話の中で、いずれの出版物にもほぼ搭載されている「犬とその影」に限って、その表現形態から寓話としての特性である訓蒙までについて詳細に比較分析を試みた。その背景には、今日、保育教材の素材として扱われているにもかかわらず、「盗む」という用語が作品の冒頭から3回も使用され、さらに印刷を初版から4回重ねているにもかかわらず改訂版に至っていない実態について、果たして許容されている理由は何かを探求しようとしたことである。

結果として、歴史的に時代を遡ると「盗む」というキーワードの表記されている作品、そうではなく「犬が肉塊を銜えて登場する」ところから始まる作品の両方ともが存在したことが判明した。また、読者は話の内容（展開）で十分に道徳律、いわゆる訓蒙を受容できるにもかかわらず、史的に著名な文人たちによって執拗に訓蒙の解説を力説し、多くのスペースを割いていることも時代の特性として検証できた。

キーワード：イソップ寓話 盗む 訓蒙 犬とその影 保育・教育教材

1. 問題の所在

ある保育教材制作手引き書¹に「よくばりないぬ（イソップ童話）」と明記した脚本が掲載されている。「お腹のすいた犬が町へ行き、『肉を盗んでこよう』、と肉を盗みに行き、まんまと肉を盗んで町から帰ってきた²」という件の文章で、「盗む」という表記を3回も繰り返しているところから始まる話を取り上げている。物語のプロットはイソップ寓話「犬とその影」とほとんど近似している。

ここで係る問題の所在を確認する。まず、教材作成の目的で出版されていることに対する傍線部分の表記に違和感を感じたこと。第2に、1997年から2002年

までに4回刷りを重ねている。扱いやすく購買力のある教材といえることができる。それだけに、影響力も大きいと思われるので、これら表記の可否について疑問を残すところである。

そこで、イソップ寓話の歴史的背景をたどり、明治期からのイソップ寓話の出版物中、当教材の話材として取り扱われた「犬とその影」に限って比較分析し、物語における訓蒙の意味、役割、表現の経緯を明らかにしようとするものである。

2. 祖本の流れから研究対象本へ

『古活字本 伊曾保物語』の解説で、中川芳雄は『物

語のいではじめの祖』が竹取物語であるなら、西洋渡来の物語の祖は、伊曾保物語であろう」³の記述の通りと考える。その伊曾保物語は『日本古典全書 吉利支丹文学集下』⁴並びに『日本古典文学大系 仮名草子集』⁵にてもその物語を確認できる。

このイソップ寓話集が日本に翻訳出版されたのは、1592年キリシタン出版物で、ローマ字表記の天草本『イソポのパブラス』が出て、1610年国字本『伊曾保物語』が、さらに、万治年間（1658年～60年）絵入り本仮名草子で民衆に流布した。1872年渡辺温『通俗伊蘇普物語』の出版や『尋常小学校読本』中に搭載されて大衆化してきた流れがある。

これらの流れを踏まえ、入手している実本を元に分類し、前述の「犬とその影」を中心に、表1の33種について分析を行った。これらは明治期、大正期に出版された本（再版、復刻等を含む）に限定したものである。

対象とした作品群を主旨である「肉の入手法」の内容表記に沿って、

- (1)単に犬が肉塊を盗んだ、または、肉屋に貰った(肉屋から盗んだ)表記のあるもの。(Aと表記する)
- (2)犬が肉塊を銜えたところから登場し、話が始まるもの。(Bと表記する)

に分類した。これらの分類で該当する作品として、Aは10種、Bは23種確認できた。さらにAに関して時代

の分類では明治期4種、大正期6種であり、Bに関しては、明治期15種、大正期8種であった。33種の事例として図1～3を挙げる。それぞれの物語について、次の観点に沿って分析を試みていく。

図2 漢譯伊蘇普譚 阿部弘國 明治9年⁷

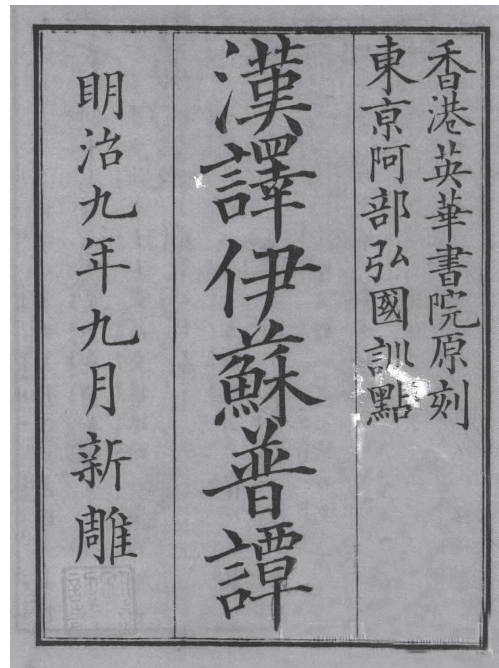


図3 AESOP'S FABLES 直譯講義全書第壹篇 伊蘇普物語 真譯講義 全 栗野忠雄 明治30年⁸

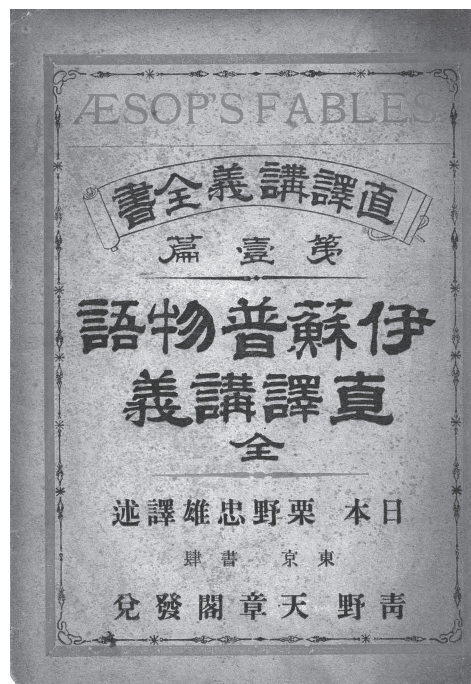


図1 訓蒙話草 福澤英之助 明治6年⁶



3. 物語の題名表記について

Aでは10種のうち9種が「犬と影」「犬と其の影」「犬及彼ノ影」であった。主人公の影に対する判断の誤りを指摘するキーワードで表記されていることが分かる。後の1種は明治5年の『通俗伊蘇普物語（六巻）』に書かれた「犬と牛肉の話」のタイトルで、「牛肉」と書いて「ニク」と読ませるルビが振られている。しかも、それまでの「伊曾保物語」から「伊蘇普物語」に表記が移された最初の頃のものである。

一方、Bでは、Aと同様の「犬と影」、及びそれに近いものが11種、「欲張タル犬ノ話」「大慾は無慾」「大慾は損」など寓話の本質である教訓をタイトルにしたものが8種、「犬とししむらの事」「肉の片をもつた犬」など、物語そのままの描写を装ったものが3種であった。

A、Bの特徴としては、「盗み」の言葉が表記されているAには、主観の混入した「欲張り」表記が皆無であったが、しかし「影」の判断を見誤ったがゆえに遭遇した出来事ゆえに「慾」につながる物語なので、「影」表記は見逃せない。抛って、「影」及び「慾」に匹敵するキーワードのタイトル描写がおよそ全体の85%を占めることが判明した。反対に、感情移入の気配のない淡々と描かれたタイトルは5種に留まったことになる。

原本となった物語のタイトルをそのまま生かして訳するか、意識を含む感情の移入を主に置くかで表記が主観、客観の双方向に分かれたのではないかと思う。ただ、この偏りを分析する手立てとして、Aのジャンルに分類した本は、英語学習のためのテキスト用に出版した上梓本が殆どなので、「The Dog and his Shadow」がそのベースになっていると考えられる。いわゆる外国からそのベースにした写本を取り入れたと考えられるルートも言外に置くわけにはいかない。

4. 「犬と肉」の関りについて

Aでは、問題の「盗む」行為が何らかの形で表記されていることが見逃せない。筆者の想定では、ここまで明記されているとは考えが及ばなかった。

実際の表記場面を列挙⁹してみる。

事例1

犬ガ一度彼ノ晝飯ニ向テ肉ノ美キ片ヲ持チシ、或者ハ其レガ盗マレシコトヲ云フ然シナガラ他者ハ其レガ屠牛者ニ依テ彼レニ與ヘラレタリシコトヲ云フ其レハ我等ハ場合デアリシヲ望ムデアラフ（作品番号2）

事例2-1

或時一匹の犬が旨そうな一片の肉を得て之を晝食に充てようとした、此肉は盗んで来たと云ふ人もあるし、否肉屋から貰ったのだと云ふ人もあつたが、そう云ふ譯なら仔細はない。（作品番号4）

事例2-2 _____部分の類似表記

まあ貰ったものとして置ませう。（作品番号5）

まあ、此の方が本當だと好いのだが。（作品番号6）

事例3

或時、一疋の犬が一片の美味しい肉を得ました。それは盗んだものか、屠牛者に貰ったものか、よく判りませんでしたでしたが……（作品番号7）

事例4

犬肉舗より肉一塊盗出し引くはへたるまゝ溝をわたるとて橋の中ほどにわたりたる時（作品番号1）

事例5

A Dog once had a nice piece of meat for his dinner. Some say that it was stolen, but others, that it had been given him by a butcher, which we will hope was the case.（作品番号5）

事例1～3は「盗む」行為（_____部）を明示しながらも、その行為に対する筆者、訳者の主観を素直に書き添えている様子が窺えるものである。ただ事例3ではその行為に対しての主観であると同時に、冷静な姿勢で判断している様子であり、如何にも「盗む」行為を容認しきれないでいる場面をそのまま表記しているところとも受容できる場面で、他とは異なる。

事例4は、「いぬ、にくやより にくひとかたまり
をぬすみだし ひきくわえたまま みぞをわたる…
…」という描写である。「盗む」行為に対して言い訳
も、その行為の善悪の判断も、主観を通じて読者に考
える機会を提供する様子もないまま、淡々と物語は進
んでいく。

要するに、この場面描写が、前述の保育教材に導入
された作品の元とも判断できよう。それにしても、明
治5, 6年ごろ、すなわち盗みの物語と同時期からす
でに「肉を銜えたままで登場する物語」が流布してい
るにもかかわらず、なぜAの作品群を選択したのであ
ろうか。

事例5が当時の英語学習教材として導入されたもの
のようである。話材としても簡潔であるし、訓蒙いわ
ゆる教訓も加えられているし、教育的指導上は望まし
い作品であったと思う。このように同一英訳でも訳者
によってその解釈の仕方が異なり、それが翻訳の日本
語表現に表出しているところが、大変興味の持たれる
ところである。事例1はそのままストレートに訳して
いるが、事例2-1や事例2-2(2種)などは、訳
者の気持がそのまま反映されている翻訳の様で、ユニ
ークな解釈として例記した。

次に、Bにおける物語の肉塊を銜えた犬の登場部分¹⁰
については、次のようになっている。

事例1

一匹の犬一切レノ肉ヲ啣ヘテ (作品番号11)
一匹の犬が肉を咬へて、流れに渡してある橋を涉らう
と (作品番号19)
昔有犬過橋其口咬有肉一塊。(作品番号15)

事例2

一匹の犬が、何所から見付けて来たか、さも旨さうな
肉の片を咬へて自分の家に歸つてから (作品番号24)
一疋の犬、一きれの肉をくはへて己が家にかへらんと
せり (作品番号13)

事例3

一匹の犬が肉きれを口にくはへて、ある小さい川に
かかつてある橋の上までやつて来ました(作品番号29)

事例4

一匹の犬が一片の肉を啣へて、さも嬉しそうに、やつ
て来まして、(作品番号30)

事例5

イヌ ガ、サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウヘ
ニ、キマシタ。(作品番号17)
或犬が魚の骨を啣へて小橋を渡らうとすると (作品
番号18)

事例6

A Dog, crosssing a bridge over a stream with a
piece of flesh meat in his mouth, (作品番号16)

事例7

或犬しゝむらをくはげて、川を渡、(作品番号25)

事例を比較すると、「肉塊」については、「一切れの
肉」の描写が最も一般的であるのに対して、事例2の
ような「旨そうな肉」「美味そうな肉」表記があり、
肉に対する描写が少々異なるところである。

次いでその肉を食する場所指定が事例2の如く「自
分の家へ持ち帰る」と状況を含めて描写する作品もみ
られる。英訳には家に持ち帰る描写のものも確かにあ
るので、忠実に訳したことが分かる。

事例3は事例1と同様ストレートに川にかかる橋ま
で描いてしまう作品である。他では、橋の様子、川の
流れ方、河の大きさ、川でなく「溝」、澄んだ水の流
れなどとその表現は様々である。

しかしながら、肉を銜えた姿が一目瞭然に自分の視
界に写り込のむのだから、「溝」や「川」はともかく、
「河」には少々傾首の感が残る。併せて、橋の作りも
「板橋」「小橋」のように気遣いが感じられるものが
あり、「河」や「小河」の割に繊細なものもあって分
かりやすい。

事例7の如く橋の描写がなくて「川を渡っていく」
というように「橋」は読者の想像を借りて構築させら
れるようなものもある。日本人にありがちな表現が使用
されている点、身近さを感じる。

事例5の「肉塊」ではなく「サカナ」「魚の骨」な

どもあるが、英語訳で魚表記は見つけることができなかった。海に囲まれた国柄か肉より魚介類に日常生活感を想起させてくれる。魚の描写は、後述する明治期の教科書にも登場してくるのである。

結果としてA表記の型に対して、事例6のように、英語訳でも「盗む」表現のないものもあることが分かった。したがって、出典や典拠の選択に対する姿勢、果たす役割を考慮することが望ましいと考える。

5. 教科書とイソップ寓話の関係

明治5年学制が制定されてから、義務教育における教育の目安として、各教科にわたって教科書が採択発行された。『尋常小學讀本二』、すなわち2年生の国語の教科書にこの「犬と影」に相当する物語が掲載されている。明治期の読本¹⁾を吟味してみよう。

事例1

明治20年(1887) 発刊 慾深き犬の話
一疋の犬、一きれの肉をくはへて己が家にかへらんとせり(作品番号13)

事例2

明治37年(1904) 不明「タイトルのモクロク(目次)なし」
イヌ ガ、サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウヘニ、キマシタ。(作品番号17)

事例3

明治43年(1910) イヌ ノ ヨクバリ
犬 ガ サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウエニ
キマシタ。(作品番号22)

事例4

大正7年(1918) 六 犬 ノ ヨクバリ
犬 ガ サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウエ ヲ
トホリマシタ。(作品番号27)

明治20年、37年、43年と改訂の度に表記や内容が異なっている。「慾深き犬」が「タイトルなし」になり、

「カタカナ表記」へと移行していく。さらに肉塊が「サカナ」に変化する。なぜ肉ではなく魚なのか、明治期にしては教科書以外に「魚の骨」が1種ある。前述のごとく民俗性からくる特質は考えられるが、教科書が「魚」を主軸に置き換えた背景には疑問が残る。

ところが、大正7年の教科書では、改訂にも関わらず、明治43年と同じで、単元の6に入れられたことが明らかなことだけが改訂に加えられたに止まっている。

教科書の事例を掲げたので、ここで訓蒙、いわゆる教訓の表現、内容について一言記しておきたい。

いわゆる、日本の学制が布かれた明治期から今日に至るまで、教育内容としては、当時で言うならば「修身」などの教科、今日の道徳律を旨とした教育や教材は、大変重要視されてきたことは周知のとおりである。そこで、訓蒙に関する教科書の欄を確認すると、明治20年の当該書にのみ訓蒙に当たる文章があるだけで、後の時代には省かれてしまっている。

「かくして、此慾深き犬ハ、つひに一きれをも食ひえざりき。」

と書かれ、大慾は無慾の格言を明記している。しかし次の改訂からは、これらの表記は一切削除されてしまうのである。なぜか。教科書掲載素材も豊かになり、世相を反映させた話材も取り上げていることは確かである。単なるスペースの狭さからくる問題ではなく、良心的に解釈すれば、教育現場では、敢えて訓蒙・教訓を目に曝すよりも、子どもたち自身が作品から読み取り、感じ取り互いに思考する時間とする手法も教育上の展開方法として効果的だと思う。

殊に、こうした教訓めいた話の内容の上に、重層的に訓蒙を記すことは、反って子どもたちの感性を逆撫でするようなきらいも感じられる。そうした意味で削除したとするなら、寓話の有意性に賛同する立場として考察できる。

7. 訓蒙の意図するところ

表2では、訓蒙・教訓の描写について抜粋した部分を一覧にしたものである。A・Bそれぞれの事例の訓

蒙¹²に関して比較してみよう。

事例1

諺に影を握むで実を失ふといふ事あり凡世の中の人こそ浮雲たる富を慕ひてぞ。固有せる真の宝を失ふ浅ましき事なればや (作品番号1)

事例2

讀者ハ彼ノ兩犬ヲ何物ト思フヤ水中ノ犬ハ彼犬ノ影ナルヲ知ラン (作品番号2)

事例3

he had only his thoughts to dine upon. What do you think they were? 彼は食ふべきは我思想のみであった、其思想といふのは何であったと諸君は思ふか。(作品番号5)

事例4

犬は悄々と家へ歸りました。そして、其日一日何事か考へてゐました。皆さん、犬は何を考へたのでしたろう。(作品番号7)

事例1～4が、A類の訓蒙の表現である。

事例5

慾をスレバ實ガナイト云フ諺ノ如ク此犬ハ餘リ慾張シユヘ終ニ己ノ物ヲモ失イタリ人々貪リテ飽クコトヲ知ラズ他人ノ物ヲノミ羨ミ思フ時ハ必ズ此犬ノ如ク終ニハ己ノ物ヲモ失フニ至ラン慎マズンバアルベカラズ (作品番号11)

事例6

大慾は無慾に似たりといひます。(作品番号18)

事例7

諸君! 或一部の人は、あまり過度の慾のために、徒らに空中樓閣に等しい利益に迷つて、其結果手の中の寶までも、失くしてしまふ者があります。(訓蒙本文前)
(作品番号24)

事例8

訓滅 影を捉えて實物を失うな。

解説 此の話わ、言うまでもなく過度の慾を戒めたものですが、其以上尚深い意味をも含んで居るようです。即ち多くの人が、妄想の利益に迷うて、實際掌裡に在る幸福を利用することを心がけぬために、骨折つた結果が、虻蜂取らずになつて了うと云う事を論してあるのです。大な利益に有つこうとして、却つて大な損失を招くことがあるのですから、徒に人の評判などに浮されて、餘計な事に手を出すより、矢張今有るものを出来るだけ活用した方が安全でありましょう。(作品番号20)

事例9

貪り心起る事あらば浅ましき心根なりと恥をおこすべし。心に慾なき時は義を思ふ慾ある時は義を思わず。貪慾を思はんよりは、足ることを知れ。(作品番号29)

事例5～9がB類の訓蒙例である。

双方の表現に大差はない。「じっくりと身をもって考えよ」といった様相で記されている。要するに、特色として事例3・4のような読者に問いかける手段がA類に多くある。これは前述の通り、英語学習のテキストとしたとすると、その表現が一様に問いかけるタイプであるため、同一の訓蒙で表記されたと思われる。

他方B類においての傾向は、事例5・7・8・9のように、本文で十分に教訓が伝えられているにもかかわらず、2重にも3重にも壇上で校長が訓話を繰り返すごとく、この訓蒙の部分に熱き思いを記したがつていように受け取れる。そこには解説者と称して著名な人物が名を連ねているのである。

上田万年、巖谷小波、小川千甕、小山内薫などが本文よりも更に長文の解説を記し、道德律を説くのである。

以上のように比較分析を試みると、当時の教育の一つのパターンを見出すことができる。

例えば、「はなさかじい」に登場する「犬」の名前は、なぜ「ボチ」が多いのかを究明するため、昔話伝承資料を分析した結果、横断面的に地域を網羅した場合、犬の名前は「アカ」「シロ」「クロ」とその地域産

の犬の毛並みの色具合からの呼称が目立つ。ところが、縦断面いわゆる歴史的流れをたどると、明治30年代後半～大正・昭和と急に「ポチ」が目立ち始める。その背景には、明治期の学校唱歌の教科書に石田和三郎の唱歌が掲載され、その歌詞が「ポチ」だったのである。教育の力、浸透力は教科書を通して全国に一斉に広がり一律に人々は国の力を重んじ、それがすべてと教育され信奉者と化する。この効果と同様で、イソップの寓話もその素材の持つ力が国民に向けて発信する教育力となることは間違いないと思う。

その意味で、訓蒙する効果は絶大であったと思う。

8. 「犬とその影」の挿絵

まず、A類の場合についての挿絵を確認する。図4・5に事例を示す。

次いで、B類の場合の挿絵を確認する。図6～8にその事例を示す。

図7のみがスカイブルーを基調としてカラーで印刷されているが、あとはモノトーンである。

いずれも1カットのみの場面であるが、明らかに異質な類の描写であることが判る。A類には肉を銜えたままの犬と、くわえた肉が水中に落ちてしまった状態の場面とが描かれている。だが、B類の挿絵はすべて水面に肉を銜えた犬の姿が映っている絵である。いわゆる虚像に対して見誤ることなきよう訓蒙の内容と一致した挿絵ということになる。大慾に目がくらむ瞬間を伝えている。

この相違は何か。訓蒙で唱える「虻蜂取らず」と化した場面を強調するか、虚像に惑わされやすい「人間の心象風景」を強調するかは差ではないだろうか。画家の作品解釈の相違でもあろう。

また、A、B共に、犬の眼の表情が著しく険しく描かれている。落ちた肉塊に対してや、同様の肉塊を加えた水面の虚像の犬に対する妬み、憎しみが生々しく描写されていることが判る

こうした光景は今日の昔話絵本や名作物語を絵本化した場面で起こりがちな現象であり、有りがちな描写、光景ともいえる。

図4 正譯伊蘇普物語 佐藤潔譯解 明治40年¹³



図5 AESOP'S FABLES WITH A LIFE OF AESOP BY REV.C.STICKNEY 小酒井五一郎 大正3年¹⁴



図6 小學校教科書 尋常小學讀本 文部省編輯局 明治20年¹⁵



図7 新錦繪帖 イソップ噺譚 小川千甕 小山内薫
大正9年¹⁶



図8 新譯イソップ物語 楠山正雄譯 大正11年¹⁷



9. まとめにかえて

以上、「犬とその影」に限って比較分析を行ってきた結果次のようにまとめられる。

- (1)「盗む」というキーワードが入る物語が存在したことを検証した。
- (2)その元をたどる時、『古活字本 伊曾保物語 国立国会図書館所蔵の影印本の復刻版』で、元祖が「江戸時代初期、およそあるいは慶長元和の頃といわれ、あるいは寛永初期」と言われている「犬としゝむらの事」のなかにも、ギリシャ語版を翻訳した山本光雄訳『イソップ寓話集』の中にも「盗む」という用語は存在しなかったことが判明した。
- (3)保育、教育教材としての扱いから考察すると、当該作品を選択する際には、元の話の吟味を要することの重要性和必要性を感得した。
- (4)保育、教育教材として扱う場合、本来のイソップ寓話のもつ教訓性を最大に表現していくことや、最終的に訓蒙に値する表記がなされてもよいと思った。
- (5)今後、昭和初期から今日に向けて発刊されている同作品についても比較検討を行い、イソップ寓話の描写にみる意味、役割を検証していきたい。

イソップ寓話の変容と寓意性

表1. イソップ寓話「犬とその影」の対比資料一覧

(表記に関して、旧仮名遣い、旧字体は入力の関係上、現代文字表記にしたものもある)

NO	肉入 手法	年 代	書 名	タイトル	文章表現	訳者	出版社	備考
1	肉塊を盗んだ、または肉屋に貰った／盗んできた	明治5年(1872)	通俗伊蘇普物語巻之一	第十八 犬と牛肉の話	犬肉舗より肉一塊盗出し引くはへたるまゝ溝をわたるとて橋の中ほどにわたりたる時	外山捨八	渡部知新(蔵梓)	
2		明治30年(1897)	AESOP'S FABLES 直譯講義全書 第壹篇 伊蘇普物語 真譯講義	犬及彼ノ影 (The Dog and his Shadow)	犬ガ一度彼ノ晝飯ニ向テ肉ノ美キ片ヲ持チシ、或者ハ其レガ盜マレシコトヲ云フ然シナガラ他者ハ其レガ屠牛者ニ依テレニ與ヘラレタリシコトヲ云フ其レハ我等ハ場合デアリシヲ望ムデアラフ	譯術 栗野忠雄	青野天章閣	
3		明治34年(1901) 4版 初版明治三十二	AESOP'S FABLES 伊蘇普物語 真譯講義	犬ト彼レノ影	犬ガ一度彼レノ食事ノ爲メニ旨キ肉片ヲ持テ居タ○或人ハ其ガ竊マレシ事ヲ云フ、併シ他ノ人ハ其ガ屠獸者ニ因テ彼レニ與ヘラレタリキト(云フ)、其ガ實事デアリシヲ吾人ハ望ミマス	譯術 元木貞雄	小川尚榮堂	
4		明治40年(1907)	正譯 伊蘇普物語	犬と影	或時一匹の犬が旨そうな一片の肉を得て之を晝食に充てようとした、此肉は盗んで來たと云ふ人もあるし、否肉屋から貰つたのだと云ふ人もあつたが、そう云ふ譯なら仔細はない。	譯 佐藤 潔	小川尚榮堂	挿絵あり
5		大正元年(1912) 明治44年 初版・三版	青年英文學叢書 ASOP'S FABLES	犬と影 (The Dog and his Shadow)	ある時犬が自分の御馳走に上等の肉を一切れ持って居た。それは盗んだのだと云ふ説もあり、いや肉屋に貰つたのだと云ふ人もあつた。まあ貰つたものとして置ませう。 A Dog once had a nice piece of meat for his dinner. Some say that it was stolen, but others,that it had been given him by a butcher ,which we will hope was the case.	菅野徳助 奈倉次郎	三省堂	対日本語訳付き
6		大正3年(1914) 大正2年 初版・三版	AESOP'S FABLES WITH A LIFE OF AESOP BY REV.C. STICKNEY	犬と其の影 (The Dog and his Shadow)	或時、犬が晝飯にとて一片の美味(ウマ)い肉を持つてゐた。其肉は、盗んで來たのだとふ者もあれば、イヤそはれ屠牛者に貰つたのだと云ふ人もある。まあ、此の方が本當だと好いのだが。 A Dog once had a nice piece of meat for his dinner. Some say that it was stolen, but others,that it had been given him by a butcher ,which we will hope was the case.	小酒井 五一郎	英語研究社	対日本語訳付き
7		大正5年(1916)	イソップ百話	犬と其の影	或時、一疋の犬が一片の美味しい肉を得ました。それは盗んだものか、屠牛者に貰つたものか、よく判りませんでした。が……	編者 若草山人	三芳屋書店	挿絵入り
8		大正7年(1918) 大正6年 初版・三版	AESOP'S FABLES イソップ物語詳解全	犬と其影 (THE DOG AND HIS SHADOW)	或時犬が自分の御馳走にしようと思つて、一片のおいしい肉を持って居た。その肉は盗んだのだと言ふ人もある、が、又肉屋が彼に貰つたのだと言ふ人もある、そして其の事は、そう言う風であつて欲しいものだ。 A Dog once had a nice piece of meat for his dinner. Some say that it was stolen, but others,that it had been given him by a butcher ,which we will hope was the case.	譯註 紀太藤一	集文館	対日本語訳付き
9		大正11年(1922)	イソップ物語	犬と影	犬が何處からか盗んできた一片(きれ)の肉を啣(くは)へて	野田桂華	岡田文祥堂(大阪)	
10		大正13年(1924) 初版大正2年・16版発行	AESOP'S FABLES 英文對照 イソップ獨習	犬と影 (The Dog and the Shadow)	犬が盗んで來た肉の一片を啣えて (A Dog,bearing in his mouth a piece of meat that he had stolen.)	岡村 庄兵衛	岡村書店	対日本語訳付き

NO	肉入 手法	年 代	書 名	タイトル	文章表現	訳者	出版社	備考
11	最初から肉片を啜えた犬の登場	明治六年(1873)	訓蒙話草 上	慾張タル犬ノ話	一匹の犬一切レノ肉ヲ啣ヘテ	福澤英之助		
12		明治9年(1876)	漢譯伊蘇普譚 全	犬影	昔有犬過橋其口咬有肉一塊	阿部弘國訓點	青山清吉	
13		明治20年(1887)	尋常小學讀本二	慾深き犬の話	一疋の犬、一されの肉をくはへて己が家にかへらんとせり	文部省編輯局	文部省編輯局藏版	小學校教科書
14		明治24年(1891) 明治21年初版・再版	ASOP'S FABLE 伊蘇普物語	第十六 犬ト影の話	犬が口に肉の一塊を引くハへたるまゝ。小河の上	田中達三郎	日進堂	
15		明治31年(1898)	漢譯批評 伊蘇普物語 全 一名伊婆菩喻言	犬影	昔有犬過橋其口咬有肉一塊。	大清國：大儒某反譯 日本：小野筑山訓點	湊屋（藏 J 梓）	
16		明治36年(1902)	AESOP'S FABLES 英文伊蘇普物語註釋	The Dog and the Shadow	A Dog,crosssing a bridge over a stream with a piece of flesh in his mouth, saw his own shadow in the water,and took it for that of another Dog,with a piece of meat double his own in size.	註釋 河島敬藏	大倉書店	
17		明治37年(1904)	尋常小學讀本二	不明(モクロクなし)	イヌ ガ、サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウヘ ニ、キマシタ。	文部省	日本書籍株式會社	小學校教科書
		明治38(1905) 3版 明治25初版	ESOP'S FABLE 新譯伊蘇普物語	大十六譚 犬と影	或犬が魚の骨を啣へて小橋を渡らうとすると	青溪散史譯	積善館	
18		明治40年(1907)	イソツプ物語	大慾は無慾	一匹の犬が肉を咬へて、流れに渡してある橋を涉らうと	雨谷一菜庵	吉川弘文館	
19		明治41年(1908) 明治40年初版・五版	新譯伊蘇普物語	第百十八 犬と影	犬が肉を啣えて、小橋を渡りますと、	上田萬年解説	鍾美堂	
20		明治43年(1910) 明治40年初版・第十版	伊蘇普物語(イソツプ物語)	大慾は無慾	一匹の犬が肉を咬へて、流れに渡してある橋を涉らうと	雨谷一菜庵	吉川弘文館	
21		明治43年(1910)	尋常小學讀本卷二	イヌ ノ ヨクバリ	犬 ガ サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウエ ニ キマシタ。	文部省	日本書籍株式會社	小學校教科書
22		明治43年(1910)	ポケット新譯イソツプ物語	犬と影	一頭(びき)の犬が一片の肉を	馬場直美編	岡村盛花堂	
23		明治44年(1911)	イソツプお伽噺	大慾は損(犬と影)	一匹の犬が、何所から見付けて來たか、さも旨さうな肉の片をを咬へて自分の家に歸つてから	譯述者 巖谷季雄(小波)	三立社	挿絵あり
24		明治44年(1911)	十銭文庫 萬治舊板 伊曾保物語	第 十 三 犬としゝむらの事	或犬しゝむらをくはげて、川を渡、	編輯朝野房	東京百華書房	
25		大4四年(1915)	獨和對譯 獨逸國民文庫 エソツプ物語	第六十六肉の片をもつた犬	Mit einem Stucke Fleisch im Mund 肉を一切れ口にくはへて犬一澄みたる流を横ぎりぬ、	譯 小野秀雄	南山堂書店	ドイツ語表記あり
26		大正7年(1918)	尋常小學國語讀本卷二	六 犬 ノ ヨクバリ	犬 ガ サカナ ヲ クハヘテ、ハシ ノ ウエ ヲ トホリマシタ。	文部省	日本書籍株式會社	小學校教科書
27		大正7年(1918)	寓話詩 全	犬及彼影	有犬持肉片	瑞柳書院	小柳一藏	
28		大正9年(1920)	新錦繪帖 イソツプ噺譚	慾ばつた犬	一匹の犬ガ肉きれを口にくはへて、ある小さい川にかかつてゐる橋の上までやつて來ました	小川千襲 小山内薫	大鑑閣	
29		大正9年(1920) 大正元年初版・第十版	新譯イソツプ物語二百話	犬と影	一匹の犬が一片の肉を啣へて、さも嬉しそうに、やつて來まして、	チャールス・ステイツクニー述譯 西垣堯則解説	立川文明堂	挿絵あり
30		大正11年(1922) 初版 大正5年・10版	新譯イソツプ物語	犬と影	犬(画)が一片の肉を口に啣へて流の上に架けわたした板橋を	楠山正雄譯	富山房	挿絵あり
31		大正14年(1925) (萬治式=1659)	伊曾保物語 中	犬志ゝむらの事	或犬志ゝむらをくハへて川を渡。	伊藤三右衛門開板	米山堂	復刻本
32		大正14年(1925) 初版 対象1年・11版	カナイソツプ	犬ノ水カガミ	犬ガーキレノ ニクヲクワヘテ、ハシノ上マデ キマシタ。	監修巖谷小波 著者古関八州子	東京第一出版協會	挿絵あり

イソップ寓話の変容と寓意性

表2. イソップ寓話「犬とその影」における訓蒙の比較

NO	肉入手法	年 代	書 名	タイトル	訓 言
1		明治5年(1872)	通俗伊蘇普物語巻之一	第十八 犬と牛肉の話	諺に影を掴むで実を失ふといふ事あり凡世の中の人こそ浮雲たる富を慕ひてぞ。固有せる真の宝を失ふ浅ましき事なればや
2	肉塊を盗んだ、または肉屋に貰った／盗んできた	明治30年(1897)	ASOP'S FABLES 直譯講義全書 第壹篇 伊蘇普物語 真譯講義	犬と彼ノ影 (The Dog and his Shadow)	讀者ハ彼ノ両犬ヲ何物ト思フヤ水中ノ犬ハ彼犬ノ影ナルヲ知ラン
3		明治34年(1901) 4版 初版 明治三十二	AESOP'S FABLES 伊蘇普物語 真譯講義	犬ト彼レノ影	汝等ハ此二者果シテ何物ナリシト思フ乎
4		明治40年(1907)	正譯 伊蘇普物語	犬と影	説明 此犬の様に餘り慾張て他の物まで取うとすると、自分の物まで失すやうになります。
5		大正元年(1912) 明治44年 初版・三版	青年英文學叢書 ASOP'S FABLES	犬と影 (The Dog and his Shadow)	he had only his thoughts to dine upon. What do you think they were? 彼は食ふべきは我思想のみであつた、其思想といふのは何であつたと諸君は思ふか。
6		大正3年(1914) 大正2年 初版・三版	AESOP'S FABLES WITH A LIFE OF AESOP BY REV.C. STICKNEY	犬と其の影 (The Dog and his Shadow)	He went sadly home. That day he had only his thoughts to dine upon. What do you think they were? すぐごと家に歸つたが、其日はたはまた思案に耽るのみで。諸君、それとは どんない思案でしたらうねえ?
7		大正5年(1916)	イソップ百話	犬と其の影	犬は悄悄と家へ歸りました。そして、其日一日何か考へてゐました。皆さん、犬は何を考へたのでしたろう。
8		大正7年(1918) 大正6年 初版・三版	AESOP'S FABLES イソップ物語詳解全	犬と其影 (The Dog and his Shadow)	What do you think they were? みなさん、その考へとは 何であつたと思ひますか?
9		大正11年(1922)	イソップ物語	犬と影	大慾をしませうとしますと此の犬のような目に逢はねばなりません。
10		大正13年(1924) 初版大正2年・16版発行	AESOP'S FABLES 英文對照 イソップ獨習	犬と影 (The Dog and the Shadow)	The Moral: In seeking substance may be losy. 訓言: 影を取らうとすると實物までなくすることがある。

NO	肉入手法	年 代	書 名	タイトル	訓 言
11	最初から肉片を啜えた犬の登場	明治六年(1873)	訓蒙話草 上	慾張タル犬ノ話	慾をスレバ實ガナイト云フ諺ノ如ク此犬ハ餘リ慾張シユヘ終ニ巳ノ物ヲモ失ヒタリ人々食リテ飽クコトヲ知ラズ他人ノ物ヲノミ羨ミ思フ時ハ必ズ此犬ノ如ク終ニハ巳ノ物ヲモ失フニ至ラン慎マズンバアルベカラズ
12		明治9年(1876)	漢譯伊蘇普譚 全	犬影	欲貪其假反失其眞世人多有類此
13		明治20年(1887)	尋常小學讀本二	慾深き犬の話	かくして、此慾深き犬ハ、つひに一きれをも食ひえざりき。
14		明治24年(1891) 明治21年 初版・再版	AESOP'S FABLE 伊蘇普物語	第十六 犬と影の話	なし
15		明治31年(1898)	漢譯批評 伊蘇普物語 全	犬影	評日欲貪其假。反失其眞世人多有類此。
16		明治36年(1902)	AESOP'S FABLES 英文伊蘇普物語註釋	The Dog and the Shadow	なし
17		明治37年(1904)	尋常小學讀本二	不明(モクロクなし)	なし
18		明治38(1905) 3版 明治25初版	ESOP'S FABLE 新譯伊蘇普物語	大十六譚 犬と影	大慾は無慾に似たりとハ此の事です
19		明治40年(1907)	イソップ物語	一六 大慾は無慾	皆さんも慾を出してはいけません。
20		明治41年(1908) 明治40年 初版・五版	新譯伊蘇普物語	第一百八 犬と影	訓滅 影を捉えて實物を失うな。 解説 此の話わ、言うまでもなく過度の慾を戒めたものですが、其以上尚深い意味をも含んで居るようです。即ち多くの人が、妄想の利益に迷うて、實際掌裡に在る幸福を利用することを心がけぬために、骨折つた結果が、蛇蜂取らずになつて了うと云う事を論してあるのです。大な利益に有つこうとして、却つて大な損失を招くことがあるのですから、徒に人の評判などに浮されて、餘計な事に手を出すより、矢張今有るものを出来るだけ活用した方が安全でありましょう。
21		明治43年(1910) 明治40年 初版・第十版	伊蘇普物語 (イソップ物語)	大慾は無慾	なし
22		明治43年(1910)	尋常小學讀本卷二	イヌ ノ ヨク バリ	なし
23		明治43年(1910)	ポケット新譯イソップ物語	犬と影	大慾は無慾に似たりといひます。

NO	肉入 手法	年 代	書 名	タイトル	訓 言
23	最初から肉片を喰えた犬の登場	明治44年(1911)	イソップお伽噺	大慾は損 (犬と影)	諸君！或一部の人は、あまり過度の慾のために、徒らに空中樓閣に等しい利益に迷つて、其結果手の中の寶までも、失くしてしまふ者があります。 (訓蒙本文前)
24		明治44年(1911)	十銭文庫 伊曾保物語	第十三 犬としゝむらの事	重慾心の輩は、他の寶をうらやみ、ことにふれてむさぶる程にたちまち天罰を蒙。我持所の寶をも失ふ事有。
25		大4年(1915)	獨和對譯 獨逸國民文庫 エソップ物語	肉の片をもつた犬	物ほしさに魂なやみて 無益なる樂に耽りつ ありとある夢幻の姿を追ふ者は 思はざるそのために 自らもてる寶をすらも失はん 空しき寶を握むのみ。
26		大正7年(1918)	尋常小學國語讀本 卷二	六 犬 ノ ヨクバリ	なし
		大正7年(1918)	寓話詩 全	犬及彼影	賭金希富輩 宛似斯犬争
27		大正9年(1920)	新錦繪帖 イソップ噺譚	慾ばつた犬	なし
28		大正9年(1920) 大正8年 初版・第十版	新譯イソップ物語 二百話	犬と影	貪り心起る事あらば浅ましき心根なりと恥をおこすべし。心に慾なき時は義を思ふ慾ある時は義を思わず。貪慾を思はんよりは、足ることを知れ。
29		大正11年(1922)	新譯イソップ物語	犬と影	影に欺かれて本體を失ふ勿れ。
30		大正14年(1925) (萬治式=1659)	伊曾保物語 中	犬志ゝむらの事	他の寶をうらやみことにふれてむさぶる程にたちまち天罰を蒙我持所の寶をも失事わり。
31		大正14年(1925)	カナイソップ	犬ノ水力ガミ	ヨクバリヲシタ犬ハ、セツカクヒロツテキタニクヲ水ニナガシテシマヒマシタ。

謝辞

当研究に使用した資料の多くは、仁愛女子短期大学元国文学科教授 若杉哲夫先生の蒐集によるお力添えによって成し得たものである。ここにそのことを記して感謝申し上げますところである。

15. 注6に同じ

16. 注6に同じ

17. 注6に同じ

参考文献・引用文献

1. 小林雅代『保育に生かすパネルシアター』2002 アイ企画 pp. 31-36
2. 文献1. 前掲書 pp. 33-34
3. 中川芳雄解説『古活字本 伊曾保物語 国立国会図書館所蔵本影印 復刻版』勉誠社 1994 pp. 237
4. 新村出・柊源一校注『日本古典全書 吉利支丹文学集 下』平凡社 1993 朝日新聞社(日本古典全書)1957-1960 刊の復刊 統一タイトル：伊曾保物語
5. 前田金五郎・森田武校注『日本古典文学体系 仮名草子集』岩波書店 1965 犬枕、恨の介、竹齋／磯田道治、仁勢物語、夫婦宗論物語、浮世物語／浅井了意、伊曾保物語 監修：高木市之助〔ほか〕参考文献：p27-28 別タイトル：仮名草子集
6. ここに列举した写真図は、表1に沿ったものである。
7. 注6に同じ
8. 注6に同じ
9. これら事例は、表1の作品番号に沿ったものである。
10. 注9に同じ
11. 注9に同じ
12. 注9に同じ
13. 注6に同じ
14. 注6に同じ